

# 東大社会科学研究所

# 釜石から「希望」を学ぶ

東京大学社会科学研究所が進めている「希望学プロジェクト」のフィールドワークの調査対象に選ばれた釜石市で17日から20日まで、予備現地調査が行われている。プロジェクト・リー

## 共同研究プロジェクトで現地調査 助教授 玄田「地域活性化の役に立てば」

予備調査で釜石を訪れているのは、玄田助教授ら研究者16人。17日は午後から鉄の歴史館や郷土資料館を見学したほか、新日鉄釜石製鉄所従業員

OBに対するインタビューを行った。18日は引き続き新日鉄釜石OBへインタビューするほか、郷土史研究や水産業、新事業などに携わってい

ターの玄田有史助教授らが来釜。地域の歴史、産業、文化などさまざまな分野で聞き取り調査をしているほか、地域振興へ向けた自治体の取り組みなどを調べている。本調査は9月の実施を予定。労働経済学が専門の玄田助教授は「今回のプロジェクトの成果が、外部からの視点による地域活性化の役に立てば」としている。



る人を対象にヒアリング。釜石商工会議所からも取り組みを聴く。19日は、男女共同参画やNPO（特定非営利法人）の活動に携わっている人などを対象に聞き取り調査。また、18日から19日にかけて、産業構造の変化への自治体の対応や地域振興へ向けた取り組みなども調べる。20日に帰京する。

同プロジェクトは、05年度から08年度まで同研究所が取り組んでいる「希望の社会科学的研究」の一環で企画した。近代以降の日本社会で「希望」の社会的位相がどのように変遷したかを予備現地調査で釜石を訪れ、鉄の歴史館を見学する研究者ら

を、法学、経済学、歴史学、社会学などさまざまな角度から解明し、現代社会における「希望」のあり方を考えるのが狙い。

フィールドワークの対象地選定に当たり、昨年開いたシンポジウムには

250人ほどが参加。この中で新日鉄の関係者から釜石を推す声があり、同研究所の研究員の間でも釜石への関心度が高かった。これを受け、近代日本の産業発展と、その後の展開が集約的な形で現れている、として釜石を研究対象に選んだ。

調査は、龍谷大学や法政大学など東京大学以外の研究者を含む30人ほどの研究者を4つのグループに分け、連携を取りながら進める。歴史調査グループは、製鉄所従業員OBを対象に調査するほか、地方文化などについて調べる。社会調査グループは、希望をテーマに市民対象のアンケート、インタビューなどを予定。企業・経済調査グループは、新日鉄釜石を中心に釜石地方の労働者社会の形成と展開、産業

構造の変化による地域経済への影響などを調べる。政策・自治体調査グループは、産業構造変化への対応や地域振興への取り組みなどを調べる。今回の予備調査を踏まえて調査の最終計画を作成し、本調査は9月に実施。さらに、東京などの在住者を含む市内4高校の同窓生らを対象にした調査なども予定。これらのフィールドワークを経て07年度に成果を取りまとめ、報告書を作成する。予備調査に取り組んだ玄田助教授は「苦しい時期を乗り越えてきた釜石市のみならず非常に前向きなものを感じた。希望と失望を繰り返してきた釜石からは学ぶものが多いと確信している」とプロジェクトの成果に期待をこめる。